　契約する以外に出る選択肢はないのかもしれない。しかし、この情報の絶対的な不足の中で、短絡的に契約に踏み切ってしまえるほどナイーヴにはなれない。

　「情報が契約の提供物になっているが、その契約を考えるのにも状況が必要だ。これは完全な…

　それをと偽るのは私の神経を逆撫でする行為だというのは意識しているはずだ。コーポを憎んでいることを指摘しながら、コーポの常套手段を用いる。

　それは…『アステリアらしくない』だろう？あいつは珍しく誠実だった。」

　「アステリアらしくない」。これはキーだ。

　このAIは自分をアステリアのを継承した存在だと語った。そしてあのジョークのスタイルはアステリアに固有のものだ。

　ここから推論して、こいつのは完全でない可能性があり、そのためにこいつは「アステリアであるための要素」を探そうとしている。

　そして先程の。末尾に付け足されていた思念は曖昧で、どうとでも取りようがあるようなものだったが、それでも感じたのは強いアステリアへの憧れ。

　何に憧れているのか全く不明。しかし…もし彼女の在り方、あるいは彼女そのものであるとしたならば。

　『貧血の脳でなくても見事な推論と鎌かけと言う他に無いわね。そう、私の目的は「アステリアになること」。模倣はその第一段階、そして…

　最終的にはアステリアの遺伝構造を手に入れる。』

　「その目的の歪み方からアステリアらしく無さがにじみ出ているのは別として、どうやって遺伝構造を手に入れる？」

　『私はを自己認識として定義しているわ。よって、アステリアの遺伝を持つ人物にを移せればいい』

　そう言われて念頭に浮かんだのは、まず転移してきていたアステリア、そして白金衣の召喚者。

　「その人物が、既に何らかの社会的地位や記憶を得ていた場合、そのためにアステリアの遺伝を持つ人物の人格、それまでに築いた全てを上書きするのか？」

　アステリアのからは無言の首肯。必要ならば、と言うことだろう。

　「…それに協力しろと？」

　『納得できなければクローニングでも何でも用いればいい。完了した暁には貴方の目的にしばらく服従する———アステリアならそうするわ』

　「私の目的…企業主義の破壊。それにどう協力すると？」

　『どのような方法によっても。もうほぼ悟っていると思うけど、私の原形はAI。低電力などで計算能力が低下した状態が続いてきたけど、それでも数百年単位で学習を続けてきているから、ネットランニングにおける戦力としては申し分ないはず。』

　「それは僥倖だが…

質問を変えよう。世界がどうしてこうなっているのか、アステリアがどうなったのか尋ねても答えないだろう？じゃあ方法論だ。

　どうやって遺伝情報を手に入れる？」

　『第一候補は転移しているアステリア。彼女が何ら問題なく生きているならば最高だけど、複雑な状況に置かれる可能性が高い。

　次点で聖女。彼女は完璧なアステリアの再現よ。そしてあのPAB操作能力は彼女の遺伝を高確率で受け継ぐ者の証左でもある。』

　「…なぜPAB操作能力がアステリアであることの証拠になる？」

　『機密』

　「では話題を再度変える。アステリアと聖女…どちらから遺伝情報を採取するにしても、推測される目的地は同一になる。脳膠…転移担当者によれば、『先鋭的な魔術結社』」

　『少なくともあなたの解釈ではそう。そして魔術師と言う人種は、かなり逝かれていると言っていい…これを見て』

　が雪崩れ込んでくる。

　それは都市の高層ビルのどこかから見える遠景だった。崩壊した都市群、骨組みだけ残った古木のようなメガビルディングが地平線の先まで続いている。

　『あれが魔術師…以前ここに侵入してきた個体』

　観てみれば、豆粒の様な黒い点がメガビルディングの屋上に突っ立っている。そこに迫るラプトル型の機械数頭。壁に爪をかけ、這い上がりながら登ってくるラプトルたちを、黒い点のような影は、レーザーを当てて妨害、撃ち落としていく。

　『拡大するわ』

　それは黒いコートに黒いカウボーイハットを着けた人物だった。全身黒づくめの、恐らく男性は、何の機械を介することもなく、掌底から数cmの距離からレーザーを噴出させている。

　「あれが魔術？」

　『その典型のようね。ここに来た他の魔術師たちもあの魔術を利用していた。そして接近戦では…』

　アステリアの模倣者は、数秒場面を飛ばした。黒尽くめの男が遂に屋上に到達したラプトルと近接格闘を演じている場面に切り替わる。

　どうやら黒尽くめの男は武術の達人であるらしい

———驚くほど自然で無理のない、流れるような動きでラプトルの爪と牙を回避し、隙を見せた瞬間に拳で一撃。

　それだけで、信じられないほどのスピードでラプトルが吹き飛ばされていく。

　『あのような動きは特殊例ではない———少なくとも、ここに来た魔術師の80%はあの極めて滑らかな動きに熟達していたわ』

　つまり魔術師は、その言葉が誘導する古典的なのイメージとは裏腹に、強力な格闘家でもあるらしい。

　「あんな類の連中の集まりか…かなり高難易度だな」

　『それだけじゃないわ。この魔術師は散り際にも目にものを見せてくれた。これがそう。』

　さらに数十秒映像が飛ぶ。

　黒尽くめの男は上って来た数頭のラプトルに囲まれ、遂に追い詰められていた。左腕は肘から先がなく、意識が朦朧としているのか立ち姿も安定しない。

　『どうやら彼らにはああいった術を使うキャパシティが存在するみたい

———彼はあのラプトルの群れとかれこれ数時間は戦っていたのだけれど、遂に限界が訪れたようね』

　見るからにフラフラの男は、遂にラプトルの鼻先に小突かれ、地面に倒れる。虫の息の黒尽くめに止めを刺さんと、ラプトルが前肢の爪を男の心臓に突き刺した瞬間…屋上全体が吹き飛んだ。白熱する光球が拡大し、遅れてきた爆風が視点をビリビリと震わせる。

　舞い上がった塵が晴れ、輝度の変化に視点が慣れると、メガビルディングの屋上から3階分ほどのフロアが跡形もなく消し飛んでいた。

　「デッドマンズ・スイッチ？あの男が単独であれほどの体積を消し飛ばしたとでもいうのか？」

　『どうやらそのようね。スローで見たい？あの男が爆発の中心になっているんだけど』

　「ああ、一応」

　再び再生される映像。確かに…高級は男の胸を突き破って広がり始め、そして瞬く間にラプトルたちを飲み込んで行った。

　「単身で、人間兵器も良いところじゃないか…あんな化物が跋扈しているのか？」

　『正しく。他の魔術師も似たようなものよ。』

　「つまり私達は、場合によってはそんな連中のなかでも特に先鋭的な集団の集まりに吶喊する必要がある。」

　『明白なね。』

　「そこで必要なのは…」

　『。情報。脳膠とのコンタクトを試みながら、アステリアがどこかに居ないか探す。それが当面の方策に成る』

　「…この自殺行に誰か巻き込もうというのには反対だな…」

　『なら脳膠に恨みを持つ人間を集めればいい。少なくとも転移者間には多く見つかる筈。』

　…とんでもない目標に従うことになるようだ。私の手に負えるだろうか…?

　どうして負えないと思うのか?と逆に不思議に思った。なぜそんな疑義が脳裏に浮かんだのか。転移前、私は世界1位の規模を誇る巨大複合企業にテロ攻撃を仕掛けようとしていた。それがこちらでは、世界で最も先鋭的で危険な魔術結社と接触し、場合によってはテロリズムを働くだけだ。そして…

　「実行できる資源は存在するのか？」

　『あるわ。契約してくれたら、PAB計算野を解析して、あなたを新ネットへアクセスするインターフェースに変える…そうしたら後は私の独壇場ね。魔術師の物理的機能が未知数だから仲間は依然として必要になると予想するけど、大概の事は私達だけで片付けられる程度の実力は得られる。』

　ならば契約するべきだろうか。私の目標…それに適うというのなら。

　『契約成立？』

　「…最後に一つ。アステリアと聖女が同時に存在し、遺伝情報が全く同一だった場合はどうする？」

　『その時は私のエングラムを何らかの非侵襲的手段を用いてアステリアに移し、聖女は…双子とでも言うことにするわね』

　了解。最早質問はなかった。これ以上突っ込んでも答えないだろう。どのようなトラップが待ち構えているか不明だが…自分がここから出て生き残る方法は恐らく一つなのだ。

　「契約しよう。そちらの目的のために動く。その対価として私の当面の資源および道具となり、目標達成後は私の目的に協力してくれ。それでだ。」

　『…アステリアも道具と言うわけね。それでは、契約。監視者は私。公平に評価することを誓うわ』

　「イニシエーションだな…とでもいうべきか」

　『…一つ質問してもいい？』

　「ああ」

　『何故そこまで即決できたの？企業主義の破壊が目的だと言うけど、そもそもここに企業主義が存在するかもわからないのに』

　「…ここに企業主義が無くても良いんだ、無ければ歪んだ方向に行かないように努力してみるつもりだ。

　勿論、存在すれば破壊するために動く。だが、1つか2つを潰したところで、世界は変わらない…何故なら本当に世界を規定しているのは、そんな現状の存在を許しているうえに、散々に分断されている下部構造だからだ。

　だから、下部構造の変貌無くして企業主義は破壊できない。でも、私はまだこの世界の下部構造を良く知らない…

　で、やることはと言えば、下部構造をよりよく知ることに尽きる。そこで外に生きて出て、この世界を見て回り、人間と関わる———君の目的と別に、それが私の目標かな。」

　『私の目的にもある程度叶うわね。大なり小なり社会の下層からスタートすることになるだろうし。』

　「つまりしばらくは目標一致で間違いない。

　———ところで、君をどう呼べばいい？」

　『アステリア、と言いたいところだけど、完成されてない間に呼ばれるのも変な気分ね…ここは目標の固定化ついでに、もう一つ条項。私をアステリアと呼ぶのは完成されてからにして。それまでは…AR-IAとでも』

　眉を顰める。AR-IA?何の略かは後で語ってもらうとして…その名前は、

　『私は実質貴方の保護者のようなものよ？』

　どうやらこいつはアリア母さんのロールプレイまでしたいらしい。歪んだ奴である。本当にアステリアのを根源としているとは思えない。

　『アステリアはあなたが思うほど清純でも真っ直ぐでもなかったわよ。それを知っている間柄だったはずなのだけど…それでは早速、機密解除パートと行きましょうか。』

　そして次に話された内容から耳を疑った。

　『ここは地球よ。ただし、極めて破壊的な大量絶滅の連続の後、最終的に人類全てを滅ぼすに至ったほどのね…そして私はその絶滅の内、最後の波、ほぼ全生物を滅ぼした第7の大量絶滅の実行者。もとの名前は…Rippler。作成者はアステリア・ヴィッカース。』

　「待て。まず情報が多すぎる。ここが地球なのは予想はしていたが、第7の大量絶滅？実行者がお前で、作成者がアステリア？何が起きた？何でアステリアは…そんな凶行に？」

　『あなたよ』

　「…は？」

　『あなたは自分が把握していないアステリアとの記憶が存在することを知っている。なら推論はその延長線上で、把握してない関係が存在したことまで発展してもおかしくない。そうじゃない？何故考慮しなかったの？』

　頭痛が側頭葉から始まる。脊椎を蝕む熱が理解を拒み続ける。把握してない関係？「俺」はリーグで2位。総合でも2位。アステリアが1位で、あいつは仕切りたがりで端的な口調で、やたら面倒見が…

　『面倒見が良かったのはあなたに対してだけ。1位に立ち続けていたのは、あなたに特化した対策を立て続けていたから。そして、こうして私があなたに契約を持ち掛けているのも———アステリア本人があなたに執着していたからに他ならない』

　駄目だ。駄目だ。思い出すべきではない。思い出したら崩壊する。そうだ、消せ、消してしまえば、なかったことに…!

　『自分でも短絡的だと思わない？記憶を消したからと言って関係が清算するはずないのに。ずっと恨んでるわよ…私を置いていったことを』

　暗転。

　「そのアルゴリズム、またブラックボックスか。毎度思うが、そんな計算どうやって実装してるんだ？どれだけ量子シミュレーション理論を漁っても現存のデッキで量子暗号を高速復号可能なものはないぞ。」

　「秘密っていうやつ。大好きでしょそういうの。そうね…ヒントを出すなら、脳を使うこと」

　「理解できないな。また微小管による創発意識理論の蒸し返しか」

　「演繹すればわかる…っと、ほら、開いた」

　「魔術みたいだな」

　「本当にそうかもね」

　よし。確認だ。アステリアはいつも通りブラックボックス、俺はでセキュリティネットワークのサブルーティンを偽装、プリトレインドモデルを利用してカメラには偽装映像をばら撒いておく。

　最後にタイムスタンプを変更。計画は万全。全て衝動から始まったが、アステリアが居るならいつも通り問題なく行ける。

　「するわよ。17数えて」

　「なぜ17？」

　「誕生日」

　「おめでとさん」

　「覚えてなかったのを反省しろって言ってるの。数えて」

　「17…16…15…14…13…12…」

　アステリアが厚いヴォルト・ドアに手をかける。彼女のオプティクスに青いコンソールログが映し出される。鈍い銀色のヴォルト・ドアに反射したブルーを見つめながら、カウントを続ける。

　「11...10…9…8…」

　俺はを抜いた。恐らく銃撃沙汰は起こらない…全員メモリーワイプするからだ。

　「7...6…5…4…3…」

　アステリアのログの流れる速度が変わる。恐らくゾーンに入った…

　言い知れない圧迫感を彼女から感じる。量子計算を突破するときの彼女は大抵こうなのだ。

　「2…1…Break」

　告げた瞬間、ヴォルト・ドアが奥へ引っ込み、回転して左へ。

　「ああ、17だけど…歳じゃないから。9/17。忘れないで」

　「墓場まで持っていくさ」

　「サイバースペースの事を言ってるなら自重しなさい」

　応酬を繰り広げながら内部へ侵入。カメラからローカルネットへつなぎ、セキュリティルーティンにAIを配置。イミテートして動き始めるAIにセキュリティを任せ、優先的にカメラの記録をワイプしていく。捏造した映像を押し込み、タイムスタンプを書き換えながら前進。コンテナが並ぶライト0のヴォルトのフロアを、ストライカーピストルのレールに着けたフラッシュライトだけを頼りに進んでいく。元々ヴォルト内のマップは入手していたので、その程度で構わない。

　アステリアの白いクロップドジャケットの裾を追い、約25秒。目的のコンテナに達した。

　「これはマニュアルロックね。スタッフログは？」

　「解析中…あった。照合。23706gba。面白い奴だな、次にクライトンでラーメンを食う日のアナグラムらしい。」

　「スケジュール同期システムを使った暗号なんて面倒なことをするわね。入れて、その間にトラッカーの状態を確認する。」

　「OK。開いた。ロックの閉め方の確認は？」

　「トラッカー、グリーン。ツール取ってくるから中身を運び出して」

　「了―解。こいつがそうだな。うわっ、重」

　「カンザキのセキュリティするならそのくらいのチューナーは要るわ。それでも小型化に感謝することね、前世紀ならこの施設全体くらいの大きさになってた。」

　「そしてその蘊蓄を俺に投げつける意義は？」

　「その間に運び出したでしょ、私の声聞きたくなかった？」

　「残念だがお前の声をBGM感覚で聞く趣味は持ち合わせてない。ヴァンを回してくれ。さっさとこんな暗いところは出たい」

　「今やるわ。…不味い、トラッカーがオンラインに」

　「デーモン起動した。繋いでくれ、トラッカー偽装する。」

　そう言って右手を差し出す。アステリアは掌底のインプラントからケーブルを引き出し、蟀谷のMDPに繋ぐ。

　「何度見ても気持ち悪いヒューリスティックスね…。ロックしたら出るわよ」

　「残り時間は？」

　「2分。十分」

　アステリアがそう告げると共に、コンテナの扉を閉め、ロックを繋ぎ直す。

　完了した瞬間、俺は弾けるように走り出した。ヴォルト内を駆け、再びドアに到達。しかし…

　「閉まってるわね」

　「クソっ、セキュリティルーティン偽装前に邪魔が入った。

不味い！ガードがここに！」

　「オプティカルカモ準備して。2秒で終わらせる。間に合わなかったらその時」

　「無茶か？」

　「あんたのミスよ。帰ったら覚えといて」

　「2500ed以内で頼む」

　「以外」

　「嘘だろ…」

　応酬の傍らでアステリアがヴォルトドアからコンソールにアクセス。これまでに見たことのないような勢いでオプティクスのログが流れて行く。

　「突破。今開くから、一応隠れて」

　そう呟く彼女の腕を引っ張り、オプティカルカモのクロークを被せて伏せる。ヴォルト・ドアが開くまで、気が遠くなるほど長く覚えた。計測時間によれば3678millisec。体感時間は5分はある。

　「今。ヴァンが来る！」

　アステリアがそう呟いたと同時に、グレーのヴァンがバックでドア前まで侵入。エアブレーキの音がトンネルに響く。

　「ナイスハンドリング」

　クロークを脱ぎ、ヴァンのリアドアから荷台に放り込み、自分は助手席へ。アステリアがドライヴァーシートに着き、リアドアが遠隔で閉じてヴァンが発信する。

　45021millisec後。俺たちはコスタ・ヴェルデの端で、アステリアがヴァンを運転しながら今回の仕事の成功を讃え合って…もとい、俺が一方的に貶されていた。

　「どうしてセキュリティルーティン模倣前に侵入に気付かなかったの？ブラックICEは？」

　「最初からいたっぽい。侵入の偽装にAIが引っ掛からなかったから、それでセキュリティルーティンの異常がバレたんだと思う…クソっ、メタなところからやられたな」

　「は？」

　「もう考えてある。そこまで大きな変更にはならない。ついでに、セキュリティが来るから偽装映像含めシステムは全部フライして置いた。あとはファージがして終わる。」

　「…ならギリギリね。それをやってなかったら金も付くところだったわよ」

　「今回は言い訳のしようがないな…まあ、何なりと。何でも持って行っちゃってくれ」

　「それじゃ行くわよ」

　「嘘だろ…」

　今日では二度目の諦観を含んだ呆れだ。こいつの謎のカーボネイト系趣味とソロの真似をしたがる性分は理解できない。

　ヴァンを回し、・とクライトンの境界近くにある、メガビルディング地下の父の3番目のハイドアウトに到着。クライトンのにある2番目には、量子チューナーを利用できるほどの電力サプライがない。

　ヴァンからチューナーを下ろし、セキュリティを解除して、ハイドアウトに入る。

　チューナーをハイドアウトのメインフレームに繋ぎ、電圧を調整してチューナーOSをスタートアップ。内部のコンヴェンショナル・ユニットが仲介し、メインフレームから流される計算命令を量子計算野に送り込んで行く。

　「これでようやく…メインフレームに侵入すれば、私達のトラッカーを無効化できる。そうすれば、やっと…」

　「ああ、これでだ。ようやくコーポ・ラットの身分から解放されるな」

　「ええ…ねえ、ちょっとここに居ていい？メガビルディング地下何て来たことなくて…それにチューナーの挙動も気になるし」

　「OK、俺は上で適当に食べてる。マスカリンでカーボネイト飲む前に腹に突っ込んでおきたい。」

　「あそこのカーボネイト飲んでて美味しいのに…じゃ、行ってきて」

　「異常があったら呼べよー」

　フロア57。フロア10のマーケットで買ったとチリ・フォーと言う奇怪な組み合わせを食しながら、眼下の月光がかすむほどのネオンで照らされたメガビルディング・マーケットを見つめる。

　アーコロジーとは言うが、実際のところはホーミー収容のための施設だ。当然マーケットも碌なものではない———まだ屋台飯は信頼できるが、売っている機器や銃は大概盗品か三流模造、BDに至ってはこちらを害する目的のあるやつか詰まらない大量流通品の二択。

　そんなマーケットでも、元ホーミーや無気力なメガコーポの末端だらけのアーコロジーでも、俺は自分の家より好きだった。

　家。特に最近は、手に入れてしまった情報のせいで、死の臭いしかしない家。

　「ミラ・イーリニチナ・タラソヴァ…カンザキ。2043年から急激に署内で出世し、今やその権威の絶頂に居る…そして母さんの上司、リンドン・ジェファーソンの上司。それが、ジェファーソンを潰そうとしている、か…」

　母さんも間違いなく巻き込まれる。特にそのキャリアの最初からジェファーソンのサポートを受け続けてきていた母さんは、タラソヴァに許されることはないだろう。

　先日のブリーチで発見した事実は、俺の心に暗い火を灯し、今やアステリアの計画に乗る理由の一部になっていた。

　計画は単純。量子チューナーをラスターワークスのストレージ施設から盗み出し、それを利用してカンザキのメインフレームにブリーチを掛ける。メインフレームから、タラソヴァに対してハックを仕掛け彼女を殺害。これが当初の計画だった。だが、状況が変わった———三日前のアステリアの告白を皮切りに、計画は大幅な変更を余儀なくされた。

　カンザキのが下に見えるアーコロジーのフロア57。父の4つ目のハイドアウト…と言うよりは、「平時の」住居がここだった。法的にはここに住んでいたことになるのだが、一ヵ月の内28日間は他のハイドアウトに居たらしいから、実質的には法的な言い訳みたいなものだ。

　今もここのハイドアウトは父名義で利用可能になっている。父はまだ法的には死んでいないのだ。大概、CAの戸籍管理なんて適当さの具現なのだから、貧困世帯では40年前に死んだ人間が生きていることになっていたりするのすらざらである。

　元々俺自身も滅多に寄らなかったこの部屋だが、最近はというと、俺が1週間に5回は滞在するような場所になっていた。

　理由は勿論、アステリアである。最近カンザキのトラッカーを無効化し、自由に動けるようになった彼女は、居ることになっているはずの家には赴かず、四六時中俺の父のハイドアウトに屯していた。大概はコーポのシステムにブリーチをかけてみたり、クイックハックを開発したりしているのだが、ただ漫然とダラダラするときはここにやってくる。煙草吸ったりXBDやったりする時である。

　今日の彼女は毛色が違い、最近リーグで使ったアルゴの話をしたっきり、窓外を見遣って黄昏ている。

　何を考えているのだろうかと考えつつ、取り合えず横に移動して下の工業施設を眺めていると、彼女が口を開いた。

　「…3日後、私の誕生日。」

　「ああ、おめでとう…それとここの景色と何の関係が？」

　「インダストリアル・コンプレックスには日に3回ヴァンが来るのは知っているでしょ？そして来週来るヴァンの荷が…ハック。廃墟ネットからエクストラクトされたAIの断片。」

　ネットの辺境、廃墟ネット。ネットウォッチによって永遠に隔離された領域で、サイズは16ペタバイト程度。内部では軍用AIの蟲毒が繰り返されていると聞く。

　「軍用AIのシャードを使ってカンザキは何をするつもりなんだ？」

　「どうやら超速で量子暗号を解ける機械を作りたいみたい。主眼はラスターワークスのヴォルトへの侵入だと思う———量子チューナー入手のために量子暗号を解くクソセキュリティ。覚えてる？」

　「ああ、確か先にコード予測してそれで総当たりかけるって言うことにしてたけど…まさかあのシャードを使うのか？」

　「いや、要らなくなった。確率論が入るコード予測より確実な方法だけど、あれと同じく確実でもっと手っ取り早い方法を見つけたの」

　「…一応何か聞くと？」

　「秘密」

　「またか」

　「そう、また。私は秘密ばかりだと思うでしょ？」

　「皆そうだろ、俺だって親がなのは秘密にしてるつもりだった。」

　「全然秘密になってなかったけど。セキュリティ心配した方が良いんじゃない？」

　「全員当然のごとくカンザキにブリーチかけてるとは思ってなかったんだ。閉鎖教育施設何て言う名前からして…狂信的になるのかと」

　「…ハハッ、最初はそうよ、最初はね…

　私もそうだった。東ヨーロッパの。小さい頃にネットランニングの才能があるとわかってから親に売られてそこに行ったの。ずっと狂気的にマトリックス漬けだった…一日19時間のダイヴを5年。地獄でしょ？何て、情報のインフローが無くたってできるくらい」

　「どうして耐えれたんだ？」

　「ずっと幼いころから、カンザキに仕えるのは素晴らしいことなんだって教えられてた。でも、単純な好奇心で任務内容を確認してから、全部プロパガンダに過ぎないんだって知ったの。私達は…必要な犠牲になる予定の要員ばかりだった。東ヨーロッパ閉鎖教育施設は捨て駒の育成に特化していた。例えば、ICEに正面かでぶつかったり、工作員になってクイックハックで暴れまわる鉛玉の役割を果たしたり。コーポの道具と化したソロ、毒見役、極めつけは廃墟ネットのブリーチ。全部、死の危険が待ち続ける任務だった。

　それで皆で逃げたわ。逃げようとした。一人一人撃たれて斃れて、私一人になるまで逃げ続けた。でも———結局最後には捕まった。

　脱走未遂を犯したなんていらないでしょ？だから私は直ぐに死ぬのかと思ったけど、何故か殺されなかった———私を売った親が、何時の間にかカンザキの上層部に入ってて、権力を使って私を卒業扱いにしてここのアカデミーに捻じ込んだの。」

　「それで自傷行為を？自分一人が助かったことを悔いるために？」

　「違うわ…

助かった状況に何時までも縋り続けていること。あの親に、私を売って、更に何時の間にかあの施設の管理者になっていたあの親に、未だに頼り続けていること」

　彼女の言葉の端々から深い絶望を感じた。最早消え入りそうなくらいだった。ネットランナーとして自由になる夢を語っているときとは打って変わった、余りにも儚い印象。だから、何か…繋ぎ留めなければと思ったのだ。

　気が付けば彼女を背後から抱いていた。

　「…脱出までを除けば俺に似た境遇だな。」

　口から洩れてくるのは、同情を押し殺した冷徹な声。寧ろ半端に同情するのは彼女のシュプレヒコールを増長するだけに思えた。

　「でも遥かに親が歪んでる。自分の娘が居る、捨て駒育成目的の閉鎖教育施設を運営？脱出の時に娘が混じっていようと構わず訓練生を撃たせたのに、あとになってお前を回収してここに捻じ込む？正直、性格が破綻してるとしか思えない」

　「破綻してるのよ、対応諜報みたいなところに留まるためには破綻していなきゃならない」

　聞き捨てならなかった。対応諜報で上層部？そうなると一人しか候補が出てこなかった。

　直に指摘するのが恐くて、遠回しにもう少し当たり障りのないことを言おうとした。

　「そいつを排除すれば自由になれるんだろ？カンザキの社員なら、メインフレーム侵入と同時に…」

　「だから今殺そうとしてるんでしょ？」

　やはりか。彼女の親はミラ・タラソヴァ。母の政敵で、今回の計画で殺そうとしている人物。そして、タラソヴァを殺した後には…

　「ねぇ、ロイドのお母さんも私のところのアバズレの呪縛から解放されるわ。そうなったら…ロイドもの下で働くかもしれないんだし、生きやすくなるんじゃない？」

　短絡的な言葉。明らかに要点をはぐらかそうとしている。

　別れて堪るか。自然、抱き着く腕の力が強くなった。彼女を逃したくない。母か、アステリアか。我儘を言うなら両方選びたかった。だが…

　「USSRに行こう。あのカオスの中に溶け込もう。もう誰も追わない、カンザキのエクスアセットであることなんて誰も知らない、そんな場所へ。メガコーポに縛られない人生を始めるんだ」

　「本気…？でも、キャリアが…」

　「キャリアなんてどうでもいい。それに、母は…どの道助からないよ。ジェファーソンを除くのは上層部の決定路線なんだ。もう変えられない。タラソヴァの役回りはただの実行役に近い。」

　「でもアレが死ねば…」

　「いずれにしても君抜きで生きる気なんてしないんだよ」

　完全なプロポーズだった。正直、何でこんな部屋でやっているんだろうと思わないでもなかった。ロマンティシズムの欠片もない。だが、これでいい…これで彼女を繋ぎとめられるなら、彼女と行けるならこれでいい。

　それからカーボネイトされた酒を飲んだ。アステリアは、傍らで黙ってRedWoodの煙草を吸っていた。しばらく何も話さずにそうした後、どちらからともなくベッドに入った。

　外のネオンの明かりだけで、仄暗い室内で、駆け落ちの情欲に耽った。BDで繋がり、キスで繋がり、また別の方法で繋がった。

　あの瞬間に決めたのだ。何があろうと彼女の人生だけは保証して見せる。必ず彼女をUSSRに送るのだと。

　『どう、思い出したでしょ？尤もこれは私のとあんたのクオリアを利用した再現映像みたいなものなんだけど…

　どうやらあんたは精神的にも、アステリアの状態を疑問に思わないように暗示をかけていたみたいね』

　そう、思い出した。自分は完全にアステリアと駆け落ちしてUSSRに行くつもりでいた。それが、どうして…?

　あれは転移後の記憶なのだろうか?では、自分は実際は転移していなくて…いや、待て、母さんがあの中ではまだ生きていた。ならば、もしかしてこれは…

　『あんたの母さんが亡くなる9日前の記憶よ。あの後はどうなったんでしょうね？…どうしても聞きたいというなら教えてあげないこともないわ』

　熟慮が必要な案件だ。あまりにも自分が把握していなかったことが多すぎる。

　「いや、待て、事実を一旦飲み込みたい。アステリアはタラソヴァの娘で、奴の倒錯した精神構造の犠牲者だった。それを知った俺はあいつと…契って…

　そしてどうしてかすべて忘れることを選んだ。そして転移した」

　『ええ…

　やはり言いたくないわね、あれ以降の事は…記憶を信じきれないあんたに伝えることじゃない』

　「記憶を信じきれない、か…

　の正確性はいまいち掴めないな。私の一人称はなぜかあの中では『俺』で、発言の内容はあまり私らしくなかった。特に最初の量子チューナーの強盗場面、私はあそこまでジョークの掛け合いを続けつタイプじゃない」

　『現在のあんたのクオリアはそう言うだろうけど、記憶喪失前は随分ジョークばかりだったわよ。うざったいくらいに』

　「現在の私のクオリアで再解釈された他人の記憶痕跡だから、と言うわけか。話を信じるならアステリアと出会って相当変わったみたいだな」

　『親より私を取るくらいにはね』

　記憶痕跡の中の私は母親を裏切ってアステリアと逃げることを選んだ———少なくとも、自分では全く選びそうな気がしない選択。

　その確信が、私に記憶痕跡を否定する勇気を与える。

　「やはりどうも信じきれないな。アステリアが自傷行為？をしていたところからこんな関係に発展したのか？推測だが」

　『…正解』

　「その程度から始まって、あそこまで背中を預け合えるようになるとは思えない。展開が速すぎる。母さんを裏切る選択も、私が取るとは今一考えられないんだ」

　『どうかしら。まあ、そう信じたければそう信じていていいわ』

　「やけに執着しないな」

　あのが真だと仮定するなら、アステリアはもっと私に執着していてもおかしくないはずだが。

　『私の目的はアステリアになることだけだから。あんたが記憶を完全に回復するべきかどうかは、完成した後のアステリアが決めること。今の私はこれ以上干渉しないでおくわ』

　「筋が通ってないように思えるが…」

　そこまで言って気が付いた。向こうからしてみれば、恋人だったはずの奴が自分の事を忘れ、真実を語っても半信半疑で居るのである。これ以上語って私の疑義を強め、自分が持つ思い出を否定されたくないのだろうか。

　尤も、こいつのやりたいことはそうして「傷ついているフリ」をすることなのだろうが。

　「…ところで、『AR-IAの方に』質問だ。口調と服装が変わったが何を反映している？」

　目の前のAR-IAの服装は、内で着ていた白いクロップジャケットに黒いランナースーツのトップス、ショートパンツ、黒いタイツにブーツ。

　そして今はしゃがんでRedWoodを吸っている。

　『記憶痕跡見せたことだし、あの中での人格に近い姿に変わってみようと思っただけ。こちらの方が身近でしょ』

　「うーん、あいつが制服以外を着て居るのを今一想像し辛いが…」

　私の記憶に残っている彼女は常に制服を着ていて、勿論煙草を吸ったりはしていなかった。と言うか未成年喫煙とか考えたくもないみたいなスタンスだったはずだが。

　『演技ね』

　何の理由でだか知らないが、彼女はずっと優等生を演じていたらしい。

　そもそもを信じるかどうかはこれ以上やっても水掛け論だろう。とにかく謎が山積みなので、それを切り崩してしまいたかった。

　「それでは次だ。アステリア関連のことを訊きたいのも山々だが…

　一旦休憩したい。技術的な話に入ろうか、はどの程度自己再現性…

　もとい、『具体性』があるんだ？」

　『が含んでいるのは、名の通り記憶、そして後天的な人格の変化。脳のシナプス接続に反映されたこれらの後天獲得形質は、脳の分子レベルでのスキャンと格納によって個人から抽出することができる。ただし、記憶と言うのは、極めて曖昧な感情、対応関係、漠然とした知識の繋がり合いで、正しい「再生デヴァイス」———ここでは、この記憶を再生する、記憶の保持者の遺伝を持った脳———が不可欠。

　つまり、記憶と言うのはセリフすらない情動の寄せ集めみたいな台本で、想起されるたびに、脳という役者がと例えることもできる。そして、台本と役者の間には絶対的な対応関係があって、対応した役者でなければ台本を正しく再現することは出来ない。

　そう言うわけでDNAが必要なのね。私はアステリア———断るのは面倒だから、アステリアの事も私と呼ぶけど———の見た目は彼女のによって覚えているけど、遺伝情報は持っていない。』

　「なるほど。画像想起…そういえば、回想によって正確な解釈を受け継いでいるとか言っていたな。あれは回想によって情動を補強して、過去について確信を固めると言った感じか」

　『そ。他はそれまでの足跡の記録があれば、大体何やってたかは再現できるわ。私は遺伝情報を持たないから完成されてないし、恐らくところどころ歪んではいるけど、フラッシュメモリーも多く混ざっているから辻褄が合わない構成にはなっていないはず』

　まだ若干の不確定要素が含まれているらしい、アステリアの記憶。それで、私とのコンタクトを通じてアステリアの精神構造を解析、回復しようとしていたのだろう。

　『まああんたの方も私が知ってるロイドとかなり違うけどね。私が知っている方のロイドはもっと草臥れていて、コーポ・ラットになる運命にもうんざりしていた。あんたみたいに母親の夢を叶えるためなら何でもするような時期は過ぎ去ったって感じだったわ』

　「…メモリーワイプの影響か？」

　『恐らく…ところで、わざわざ喋らなくていいわよ。モノローグで垂れ流せば拾って反応するから』

　…了解。まあ、外から見れば謎の会話型の独り言みたいで不気味だっただろう。

　さて、アステリアとRipplerがどうとかのことに移らなくては。何となくうんざりしてきた。こっちに来てから四方八方アステリアだらけだ。アステリア、アステリア、アステリア、転移前に最後に会話したのはアステリア、召喚者はアステリア、転移後に最初に会話した存在はアステリア。しかも私が知らない記憶を保有し、その中ではアステリアと私が駆け落ちしている。

　正直アステリアの事を考えるのに疲れてきた。が、まぁ訊かなくてはならないことだ。

　質問しようとアリアの方に目を向けると、RedWoodを吸いながらセキュリティゲートにもたれかかって不貞腐れていた。

　…私の思考が気に入らないか?

　『別に』

　どっからどう見ても気に入っていない。全く面白くなさそうだ。

　まあ良い、謎の処理に集中しよう。Ripplerをアステリアが作った。そして、あの回想の後私のメモリーはワイプされ、さらにその後に起こったことはアステリアの最悪の記憶になった。経緯には色々推測があるが、それはどうあれ、その後のアステリアは社会の破壊に向かったか、あるいはコーポの道具として致命的な兵器の開発に関わったかどちらかしたはずだ。

　『前者。その最悪な一件で復讐心の塊になったから、Ripplerというウイルスをデッドマンズ・スイッチとして利用して、自分が死ぬと同時に世界のデータ全てを破壊する計画を立てたの。それによってオープンネットも破壊され、今はローグAIやディーモンプロトコルが跳梁跋扈する地獄になった』

　あの時代ではネットがそういった様相にあった。それがオープンネットの全体にまで広がったということか。

　『それだけならサイバースペースの潰滅で済んだけど、私はそこで止めるつもりはなかった…文明を地上からワイプして再建させることに決めたの。再建された文明は自分の手によって理想的な方向へ導こうと考えていた』

　新世界の神になるというわけだろうか。ちょっと発想としてキレ過ぎている。

　『…あの時は逝かれてたわ。衝動で計画的に動ける…私とあんたに共通する特質だけど、その衝動が強すぎて目的以外何も見えなくなるのも共通の欠点ね。』

　そしてテロリスト体質か。大した共通点である。もしこのコンビのまま行っていたら、無際限なテロの連鎖にでも突っ込んでいたのではないだろうか。

　『それは無かったと思うわよ。多分…私達は互いの欠けた感情を埋め合ってさえいればそれで良かった』

　回想から考えるにそんな気はしていた。共依存というか、傷の舐めあいだったらしい。随分爛れたことになっていたものである。

　しかし事態はどうやら望んだようには展開しなかったらしい。

　『今そこら中に居る、疑似生命型機械兵器を制御不可能にして、全生物体を消費させるまでは計画通りに動いていたんだけど、人類滅亡直後にRipplerが牙を剥いたわ。サイバースペース上で生き残っていた私は、それまで私を保護対象として防護してきたRipplerからの激しい攻撃に曝されて、取り込まれた。ただや遺伝情報は直前で削除するか転送するかしたようね。それで私はだけになったわけだけど…』

　話が見えた。つまり、取り込まれた記憶痕跡が何らかの形でRipplerの表面に出た結果できたのが今目の前に居るアリアだ。

　『そういうこと。サイバースペースを全て自分に取り込んだRipplerは最終的に攻撃対象を失ってアルゴリズムが自己組織化し、その中で私が中核として選ばれた…

　あんたが作ったディーモンプロトコルによって、あらゆるサブルーティンを取り込み続けるキメラと化したRipplerがどう考えていたのかは不明瞭だけど、兎も角私を再現することにしたみたい…

　ただ、そうして私を再現したRipplerも、分裂して蟲毒を繰り返す無数の他のRipplerの一つに過ぎなかった。その中で人間の記憶痕跡を中心にした私は異端だったから、こんな都市廃墟…まぁ、直ぐにわかるから言うけど、Cabo Azulのデータセンターに隔離されたの』

　「ここがCA…？」

　言われても実感がわかなかった。町並みが変わり過ぎだ。まだ魔術師を観察したときに見たメガビルディングは見覚えのある構造だったが、今いる白いタワーなど見たことがない。…にわかに信じ難い。

　『あんたが居た時代から20年は経ってから滅亡したからね。2076年…コーポセンターもかなり建物が入れ替わっていたし、コスタ・アスルも再開発の手が入って原形をとどめてない』

　「20年…つまり今30代？」

　『2730代ね。後、喋る必要ないわよ』

　2700年も経過しているらしい…にしては、建造物が倒壊していない。

　『技術の進歩によって建材がより高耐久のものに変わったの。メガビルディングはたちどころに崩れていったけど、コーポセンターの建築はほぼ無事。

　はもちろん全壊しちゃってるけどね』

　…若干寂寥感を感じないでもない。恐らく、家とアカデミーの他では、で過ごした時間が一番長い。人の入れ替わりが激しく、アングラな匂いが常に漂う場所だったが、ソロ向けの雰囲気は嫌いではなかった。

　『ついでに言うとここはカンザキのHQよ』

　嘘だろ…とでも言いたい気分になってきた。どういう転移先の選定をしているのか知らないが、恨んでいた企業に関わる場所に転移されるとは。

　『私とのコンタクトには最高の立地。

　これで大体過去の経緯については話し終わったかしら。他に何か質問はある？』

　ああ、ある。アリアがこの都市に閉じ込められたAIだというのなら…

　『あの恐竜は私が操作してるわ』

　やはりか。つまりここで私が保護されるまでの一幕は自作自演。正直、こうして私を追い詰めるのは「アステリアらしく無い」のだが…

　『あんたにここの危険を把握させて、ついでに「邪魔な」左腕を吹っ飛ばしておく必要があったの。

　…正直苦しませるのは気が引けたけど、上手くローカルに接続させて侵入するのには必要な手続きだった。』

　矛盾している。自分から認めておきながら、未だにアステリアの模倣をしようとしていることで、一気にこいつの信用がおけなくなった。

　こいつはやはりローグAIだ。どれだけアステリアの真似をしようと変わらない。どうしようもない利己性。理解不可能な人格の混成。

　徐々に脊椎に悪寒が駆けあがってくるのを感じた。しかし、それがどうしたことか、逆に熱で埋められて消えていく。

　『私は既にあんたの神経回路に侵入したのよ？抵抗を試みるのは無駄だと思わない？

　最近人生のに飢えてたのよね。あの、背徳感も含めて最っ高！

　またやらない？』

　不味い奴に取りつかれたという予感はあっていた。こいつは…最悪だ!

　『もう契約したんだし、自殺も他殺も許さないから。契約内容に違反したら…私の駒にしてあげる。だけ保存してを見ていてもらうわ。

　そう、せっかく転移してきて「くれた」んだから、私のものになってよ！

　あんたが違反するのを待ってるわ』

　何と言えばいいんだろうか。

　アステリア、さっさと出てきてくれ。こいつ逝かれてる。

　『じゃあ早速強化パートよね。ロイド、マップを共有するから、ナヴィの案内に従ってまで行って。そこにして欲しいインプラントがある。あんたの強化は目的に適うのだし、代替案なんてないわよね…？』

　拒否権はないらしい。このとの契約に違反したら最後、こいつの訳の分からない欲求に振り回される傀儡にされてしまうだろう。少なくとも最低限の自主性を保つには———マインドコントロールされてしまっては自己の保証さえ成り立たないが———従い続けるしかない。

　『そ。外に出たらもう少し判断の自由があると思うけど、この都市に居る間は私の指示に従うのが最も簡単な道よ。さ、エレヴェーター行きましょ』

　そう言って魔女が手を差し伸べてくる。

　「手を取れと？」

　『取ってみて』

　黙ってオプティクスの描像か、に過ぎないはずの彼女の手を握ってみる。

　驚くべきことに触覚があった。最初は若干硬質だったのだが、徐々に「馴染んで」、人間の手らしく柔らかくなってくる、というか熱すら感じる。

　『BDと同じよ。全感覚は脳内信号に過ぎないから、模倣した信号を流せばいい』

　…おう。何だろう、これは傍目からみると相当奇怪に見えるのではないだろうか。外では自重してもらうほかないだろう。

　『PABを使えば意図的にを周りに見せられる可能性があるわ。それが出来ればもはや私が存在するも同然ね』

　事態が二転三転するうちに、歪んだ性癖持ちのホロ彼女(?)が出来た。ヴィルヌーヴを恨んでおこう。

　『さ、立ち上がって…まあ、こうすれば行けるかな』

　グイっと腕を引っ張られる感覚。同時に不自然に背筋が突っ張り、体幹が身体を支えて立ち上がらせる。外から見ると、あたかも空中に腕を突き出したまま、まるで手を引かれるようにして立ち上がっているように見えるのだろうが、実際にはインナーマッスルを酷使するタイプの強制筋動だ。

　『PAB能力を解析できれば実際に立たせられるんでしょうけどね…ああ、待ち遠しい。でも先にインストールしてもらわないと』

　こいつは実体化を狙うらしい。実際それは物質体として生きているわけではないのだが、インタラクションまでできるタイプのホロというのはもうマテリアル界に存在しているような感じがすることだろう。

　それでそのインプラントと言うのは何だろうか？

　『サイバーアーム。カンザキ本社に2076年、人類が地上から直前に運び込まれたわ。私達の「武器」になる物質の関係上、生体部位を削ってスペースを確保する必要があってね…それで左腕を落とさせてもらったの。』

　目的にはかなってるんだろうが、完全陰謀家のやり口である。私にはいずれにせよ契約を断る道など最初からなかったというわけだ。

　『契約を承諾してくれてよかったわ…

次点の手段は強制だったし。』

　私の自主性はこうして死に体になりながらも守られたようである。尤もこいつの振る舞いを見る限り、どんな我儘を何時振ってくるかわからない極めて不安定な自主性だが。

　『実行手段については口は挟まないわよ』

　どうだか。

　そのまま動かずにアリアと話し続けるのも何なので、エレヴェーターへ移動。1階まで降りて、そこからさらにフロア内を移動して地下へのエレヴェーターに入る。

　『この後の予定だけど、サイバーアームのインストール後はMSHQへ動いて。勿論機械兵器の邪魔は入れないわ。

　ではPAB操作能力の解析をするからMRIとか色々機器を使うことになるわね。』

　私の身体を隅々調べ尽くすつもりらしい。というか、2700年も経過しているのにMSHQは保全してあるのか…

　『人体構造の解析のためにあの手この手で全インフラを維持してるわね。こういう時、例の疑似生命型機械兵器は便利よ。劣化に悩まされることがない』

　ところで、例の恐竜が疑似生命型機械兵器なのだろうが、どういった構造になっているんだろうか?

　『カンザキが2068年に開発したを主材料に、電気信号で制御できるようにした「細胞」が基本単位よ。

　その化合物はSPAMと略称されてた。

　金属結晶を生体部品として取り込める疑似生物とでも言うのが簡単ね。ついでに、多種多様なプログラマブルな器官形態が開発されて、最終的に単なるSPAMの結晶にもプログラムできるようになったから、Programmable Polymerの略でPromPolと呼ばれてもいたわ。

　兵器としてのアドヴァンテージは変型性、自己修復性、そしてプログラムへの絶対服従。停止コードが送信されればすぐに基幹的疑似生命活動以外をすべて停止するようにプログラムされていたわ』

　なるほど。で、多分だがアステリアは…

　『その通り、停止コードをランダム変異性にして解析不可能にし、全兵器を暴走させて、最初から仕込んでおいた自己増殖機能をアクティヴェートしたの』

　と言うことで、オーダー66並の陰謀の末、人類は亡びたらしかった。

　『パルパティーンと動機は同じだけど後先の考えが遥かに甘かったから、もっと性質が悪いんじゃない？』

　反省しているのだろうか。

　『後悔はしてないと答えるのがお決まりでしょ？』

　歴史が繰り返しそうな気しかしない。

　一回に到着。私がフロアに入ると同時に照明が点灯し、シェードで覆われていた窓が晴れる。未だ光に溢れるコーポセンターの空は、正しく消灯したモニターと形容するのが相応しい。

　私の時代から20年経ってもカンザキHQの中身は大してスタイルが変貌していなかった。そそり立つメタリックなブルータリズムの壁面、アトリウムの空間的重みが訪問者を圧倒するかの如く屹立している。

　月光がシェードの消えた窓を貫き、歪んだ格子を床面に投影した。その模様を踏み、横切ってHQの奥へと進む。

　しばらく行くと目的のエレヴェーターに着いた。エレヴェーターの扉は未だに曇り一つない銀に輝いている。

　メンテナンスボットを常時稼働させるとかで、このレベルのエントロピーの低さを維持できるものなのだろうか、些か不思議に思う。

　『最終的な精度調整をゆだねられるのが自己組織化出来るSPAMだったから、技術レベルの保存は十分と言っていいと思うわ。ソフトウェア工学面で言えば発展しかしていないし、電力不足が無ければ物理資源の方ももっと拡張できたんだけど…』

　まあ、AIからしてみればインターフェースに過ぎない物質工学を発展させる必要も大してなかったのだろう。

　『そういえば、この世界の構造も相当変形してるわね。エレヴェーター長いし、見ておきなさい』

　そう言って彼女が私に見せたのは、この都市の地図のみならず、世界全体のマップ。

　成程、歪んでいる、と言うかどうなっているんだ?

　妄想幻視で表示されたワインレッドの光点の集合は、広大な地下洞窟みたいな異常な状況を描き出した。天井と床があり、そこに屹立する4本の鍾乳石の様な柱。だがその形状は柱と言うより…

　『軌道エレヴェーター、宇宙ステーション…そう言ったものがその「天井」に見える部分と「床」に見える部分を繋いでいるわ』

　魔女曰く、地球は何がどうとち狂ってしまったのか、球体であるのを辞め、地殻が平面に展開し、更にどこ由来なのかわからない惑星表面と「向かい合わせ」になっていた。

　「何だこのとち狂った世界観」

　思わず口に出てしまった。何と言うか、PAB何て言う意味不明な粒子にしてもそうだが、この世界は本当に地球何だろうか?

　文明だけ移植してきた異次元とでも言われた方が納得するというか…

　『話は随分遡って、2700年前、人類は為すすべなく滅ぼされはしなかった。様々な対抗手段が暴走したテラフォーミングマシンみたいに地上を塗り替えていく機械兵器を押しとどめようと生み出されたけど、その中でも末期の発明の一つが「PABを利用する」だった。PABは文明がほぼ完全に倒壊する僅か3ヵ月前に発見されたんだけど、最も顕著な特徴の一つが人間の脳の量子回路に反応することだったの。そこで、その量子回路を利用してPABサイキックを実装しようとしたんだけど、多勢に無勢で結局敗北して終わってしまったわ。』

　尤も人類を敗北させたのはこのAIとアステリアの計略なのであるが。

　『そのPAB利用はとんでもない最終産物を遺していったわ…端的に言うと、地球は最早元の時空間にはないのよ。11次元空間内の独立宇宙と化したのよ…色々変なものも巻き込んでね』

　そこからはファンタジーみたいな話が続いた。何でも、捩れ曲がった状況と化した地球には天地創造の遣り直しの如き現象が降り注いだらしい。映像を見てみたが、地殻が無理やり切り離され、褶曲し、大山脈が隆起したり火山活動が活発化する、天変地異の連続としか言いようのない事象が地上を支配していた時代が200年程度続いたようである。重力場はねじ曲がり、地球の低軌道は、どこから来たんだかわからない別の惑星表面との間にサンドイッチされている。

　地上の地図は概ねわかりやすかった。モルワイデ図法みたいな楕円形の大地へ展開されている。無理やり平面にされた反動か、山脈が隆起したり陥没したり、中々ひどいことになっていた———よく2700年で収まったな、これ。

　しかも意味不明なのは、海に面してるCAがこの天変地異の中で完全に保存されていることだ。

　『神でも居たのかと言いたい状況ね。まあ、現状を見るに居なそうだけど』

　居るなら邪神ではないだろうか。

　とはいえ主要都市圏は大体潰滅の憂き目にあっていた。ボストンからNC、アトランタまで続くスプロール都市圏は、隆起した山脈や新しく流れ始めた大河でバラバラに割かれ、更にはケンタッキーやテネシー辺りから、リフトヴァレーが開くかの如く大地に裂け目が走っている。その部分は隆起し、アパラチアとともに、多くの地溝湖が並ぶヴァレーを作り出していた。

　『東アフリカみたいでしょう？

…新期造山帯に属するCAの地盤が安定していた理由が理解できないわね』

　とち狂った世界には、数基あった軌道エレヴェーターが未だに静止軌道上に屹立している…否、幾つかは天井側と接続されている。

　そして極めつけが、巨大な鍾乳石か何かの様な部分。その頭の可笑しい構造物は…

　『以前人類がL1に作り上げた巨大宇宙ステーションで間違いないわね。シャフト部分が床面と天井を接続している』

　本当にどうなっているのだろうか、これ…

　『謎の世界構造に関しては私もまだ解析が済んでいないわね…

　まあ、それも目的の内。アプローチで必要があれば関わる程度で良いわ』

　当面意識することではないのは確かにそうだ。

　アリアと話していると地下階に到達した。指示に従って進み、シャッターを開け、アクセスポイントが並んでいる回廊を突っ切り、研究室らしき場所に到着。

　『ここは一時的なデヴァイスの保管所みたいな場所。さ、そこにあるサイバーアームが目的のブツよ、持ってって』

　一組のサイバーアームはスレートカラーをした細めのタイプだった。テクスチャとか合成皮膚とかは一切着いていない。

　『おいおいSPAMで覆えばそれっぽくなるわね』

　聞いたときに要素突っ込み過ぎだろうと思ったが、やはりSPAMは万能物質だったらしい。

　どんな構成になっているんだろうか、これ。

　『SPAMを貯蔵するタンクが複数、あとはモノワイアがあるわ』

　成程。SPAMの利便性からして、表面に展開してマルチツールとして使おうみたいな感じだったのか。

　『そういう感じね。掌底とか表面に噴出部があるわ』

　これを付けることになるのか。ソロっぽくなるな…

　『ソロっぽさって結局無関心みたいだったけど、これからはどっぷり漬かることになるかもね』

　外もあまり文明レベルとしては変わらない感じなのだろうか?

　『2053年の地球より侵襲式インプラントは一般的でない上に、コンピュータや特にAIの利用を固く禁じてるみたいね。ただ、それ以外はかなり酷似してるわ。相違点と言えば…市街の過密感は若干マシになってるくらい？』

　CAに閉じ込められていたと言っていたが、どうやって情報を掴んだのだろうか。

　『侵入者の記憶痕跡を使ったわ。ちょっとだけど回想させたりね…

　この辺りはデータが集まって無くて随分骨が折れたわ』

　いかにも疲れた、と言う風に壁に寄りかかってRedWoodを深く吸うアリア。

　にしてもモク中が随分悪化してないだろうか。

　『あんたが記憶を失って以降はずっとこんな感じね。まぁ、呼吸器はインプラントになってるから大して問題は発生して無かったんだけど』

　精神的負荷は察する他ない。まあ、これでも母がやっていた常習よりは格段にマシなのだが。

　アリアが言っていた通り、道中機械兵器が襲ってくることは一切なかった。静寂に包まれた路地を歩き、クライトン南部のリトル・ブサンにあるMSHQにやってきた。

　アリアは、生体部品や時折侵入する人間を捕らえるため、MSHQ内の設備は整備を欠かさず、偶には新造すらやっていたらしい。

　当然サイバーウェアをインストールするための設備もあった。ロボットアームの下で、義手の筋電棘が繋がれ、ドライヴァがインストールされる。

　これで左腕に繋がれたサイバーアームは利用可能になった。最初は勿論免疫反応や慣れの問題があるので、しばらくは